

白糖

池内 武

一

城下町の表通りを南に折れて幾筋か入ったところが広小路になっていて、その片隅に一軒の縄暖簾がある。薄い板瓦は半分剥がれかけて、ところどころ軒先が朽ち落ちている。初めて訪れる者には、そこが飯を食わせ、酒を飲ませる場所だとは分からないかもしれない。入り口に、土埃と

さて、あまりにもみすばらしくて、縄暖簾と呼ぶのさえはばかられるこの店に、先ほど一陣の乾いた晩秋の風が、土壁のひび割れた隙間を吹き抜けて土間に入り、懐 勘定をしながら、ちびちびと酒をすする男たちのほつれ髪を震わせたあと、脇の板戸の裂け目から抜け出ていったところである。店の中には、使い古した大きな酒樽が飯台代わりに幾つか置かれ、その間を縫うように長床机が無造作に並べられている。

「今年の冬はめつきり寒くなりそうじゃのう」

雨水の染み込んだ荒縄が、暖簾代わりに掛かっているの、かろうじて居酒屋だと知れる。

天明年間（一七八一〜一七八九）

に江戸に広まったこのような店は、松平定信の儉約令（一七八七年）によって少なからず影響を受けたものの、二、三年もしないうちに、ここ岡山のような外様の藩にあっても、その数を増す傾向にあった。市井の人々の、社会的抑圧に対するはけ口としての役割と、新しい食文化への渴望はとどめることができなかったのである。

肩先までたくし上げた着物の袖を引き下ろしながら、人足風の男が言った。燃え盛る夏の日が焦がした名残か、秋も深まったというのに、若者の肌は薄墨を流したような色合いだ。仕事仲間らしい男が、間を置かずにより込めた。

「おめえは家んなかに閉じこもって、またかかあをはらませる気じやろうが」

追いかけるように、人足たちの卑猥な言葉が飛び交い、大きな笑い声が店中に響いた。

風間弥一郎は、男たちから少し離れた樽に陣取

り、刀を床机に預けたまま広い肩を落とし気味にして、飲み終わった杯の口をさも愛しそうに舐めた。懐には、昼間、道場の代稽古で得たわずかばかりの手当てが入っている。

「俺もかかあは可愛いが、これ以上餓鬼が増えたら、一家心中せんといかんがあ」

別の男の声が耳に飛び込んできた。弥一郎は、熱爛をもう一合ばかり「ちろり」に入れてもらおうか、という誘惑に駆られそうになっていたのだが、未練を断ち切るように慌てて小さく首を振っ

中で算盤の玉が小気味よく動いた。

運ばれてきた飯に箸をつけようとしたときである。表で押し殺したような悲鳴が上がり、近くの板塀に何かがぶつかる鈍い音がした。

「斬り合いじや」

店の戸口から頭を突き出した人足が、振り返り、血相を変えて叫んだ。店内は騒然となった。肝っ玉の小さいくせに、怖いもの見たさに腰を浮かす者、身体を震わせてうずくまる者、日ごろの豪語はどこへやら、逃げ場を求めて視線を泳がす者。人そ

た。今朝食べた粥で、米びつが底をついたのを、あやうく思い出したのである。

〈毎度、裏長屋の住人の世話になるわけにもくまい〉

弥一郎は律儀に考えている。

〈この金で米と味噌を買い、借りを返しておかねばならん。それに、いまのうちに少しは、腹に滋養のあるものを詰め込んでおなくては〉

心を決めると、酒の代わりに飯と物菜一皿を注文した。これだと酒一合のお足で買える。胸の

れぞれ、降って湧いたような出来事に遭遇して、一枚張りついていた浮世の衣装や被り物が、一瞬に剥がれ落ちていく。

弥一郎は刀をつかんで外に走り出た。と同時に、広小路の向こうに、喉の奥から絞り出すような呻き声を聞いた。

黄昏前の薄明かりの中に、黒い布で顔を隠した士分らしい人影が三つ、白刃を見せて巡礼姿の男を取り囲んでいるのが浮かび上がった。真中の一人が男の胸を刺し貫いたばかりらしい。板塀

に串刺しにされた男は、崩れ落ちることもならず、尻が地上わずかのところで、引きつったように痙攣しながら止まっている。首は力なく胸前に垂れ、その男のものらしい抜き身の小刀が傍らの土を舐めている。鮮血が白装束を伝って流れ落ちていた。

弥一郎の勢いよく飛び出した足音を聞きつけ、武士たちは血走った目を向けてきた。刀を突き立てていた武士が、慌てて倒した相手の腹に足をかけて得物を引き抜き、くずおれる巡礼の懐をま

身ごなしに技量の卓抜しているのを悟ったのか、小さく舌打ちして一歩退いた。焦りが目の色に表れている。

「まだか」  
低い声で背後の武士に言った。

「は」  
短く答えた武士が、巡礼の肩上にずり上がっている筈に手を伸ばして、逆さに返した。すると、一尺にも満たないほどの細長い物が数本、地面に転がり落ちた。頭目の目に喜びの色が浮かんだ。

「全て持ち帰れ」

さぐった。もう一人が抜刀のまま、弥一郎から目を離さずに後退り、仲間に手を貸そうとする素振りを見せる。

〈殺めた上での物盗りか。許せぬ〉

弥一郎は、怖れ気もなく、ゆっくりと彼らに近づいていった。刀は鞘ごと左の帯間に納まり、腰が低く落ちている。いつでも抜ける居合腰である。

頭目らしい年長の男が、その場に突っ立ち、顎を上げ気味にして、静かに歩み寄る弥一郎を射すくめるように睨みつけていたが、その滑るような

低いがよく通る声である。命じられた武士は、地に落ちた物をすばやく拾い集めて懐に入れようとしたが、一本が手からこぼれ落ちて、弥一郎の方に転がってきた。

一瞬、弥一郎の歩みが止まった。武士たちの動きも凍りついたようになり、全ての視線が地上の一点に集まった。それは、節が二つついた物で、両脇を鎌か何かで切り取られたようになってい

る。  
〈竹に似ている。形や色は違うが、どこかで同

じような物を目にしている。はて……

弥一郎は興味を抱いた。手にとつて見たくなつた。どういいうわけか、妙に懐かしいような、そしてその逆に、見るも忌まわしいような、そんな相反する感情が交錯した。不思議な感情だった。それは、間を置かずして、ぜひ手に取って見てみたい、という強い欲求に変わった。弥一郎は、拾い上げようと身体を屈め、手を伸ばそうとした。

突然、裂帛の気合いとともに、大きな黒い影が頭目の背後から踊り出てきて、重量感のある

腹立ちを覚えていた。屈辱を晴らそうとするかのように、腹の底から憤怒の雄たけびを上げ、腰を捻つて抜刀するや、たちまち地面を蹴った。

敵は慌てて態勢を立て直し、一合、刃を交えたが、弥一郎の剣勢にひるみ、後退った。弥一郎は、そのまま突き進み、拾い上げた物を大事そうに懐にしまおうとしている別の男の手先を狙つて、刀を薙いだ。男が手を引いたが、剣先が伸びて、握っていた物を半分に断ち斬った。

太刀が頭上に落ちてきた。一撃目は体をかわしてかろうじて避けたが、そのあと、二撃、三撃と、息つく間もないほどに襲ってきた。弥一郎はその太刀風のすさまじさに飛び下がり、たたらを踏んだ。その隙に、別の男が歩み出てきて、すばやく地上の物を拾い上げた。

「先生、大丈夫ですかい」

どこかで声がした。頭目の目が、声のする方に動いたようである。弥一郎はその声をはつきりと聞いたわけではない。地面に転がった異物に心奪わくで尾を引いた。

「退け」

くぐもつた声が頭目の口から漏れて、覆面の武士たちは、笛の音とは反対の方角へと駆け去っていった。

弥一郎は、路地の薄暗闇へと消えてゆく者たちの後ろ姿を目の隅で認めながら、たつたいま斬り落とした正体の知れないものを拾い上げた。手に取ると、親指と人差し指が合わないほど太い。手の

ひらに粘り気のある汁がべとりとついた。鼻に近づけてにおいを嗅いだあと、用心しながら舐めてみた。舌先にぴりりと刺激が感じられ、そのあとに、まったりとした甘さが口の中に広がった。

「先生、それはなんですじゃろう」

傍らでおずおずと問いかける、町人らしい若い男の声でした。

## 二

翌日は、朝のうちから激しい雨を伴った北風が

吹き荒れた。弥一郎は内職にしている傘張りの手

を休めて、板の間に敷いた筵の上に仰向けになり、

釜戸の火で煤けた天井を見上げている。と言つて

も、一点を見つめているのではない。何かを思索し

ているふうに、胸の上で腕を組み、眉間に皺を寄せ

て、中空に視線を留めたままなのだ。哀しみと苦

しみが同居しているような、複雑な表情である。

傍らには、昨夜思わぬことで手に入れた異物が転

がっている。

弥一郎は、昨夜、それを駆けつけてきた役人の目

から隠した。胸の奥深くに生じた彼自身にもよく

分からないこだわりの気持ちから、そのまま

裏長屋に持ちかえっている。

(以上1月21日放送分)